平城宮東区朝集殿院の調査（平城第370次）

平城宮の中枢部は、大きく2つの区画に分かれています。このうち平城宮の中央部、第一次大極殿や朱雀門などが位置するのが「中央区」で、内裏や第二次大極殿などが位置しているのが「東区」です。今回調査をおこなっている「朝集殿院」は東区の南方に位置しており、元日朝賀などの儀式の際に貴族らが集合し、儀式が始まるまで待機する場所だったと考えられています。

これまで朝集殿院でおこなわれた調査は、主に朝集殿院の範囲や区画施設の構造を明らかにするためにおこなわれてきましたが、朝集殿院の中央の広場部分の状況は不明のままでした。そこで、今回新たに調査区を設け、調査を平成16年4月1日より開始し、現在も継続中です。

調査の結果、南門から北へ続く道路の側溝を検出することができました。側溝の位置関係から推定される道路幅は約24mで、朝集殿院南門から朝堂院南門へと南北に続いていることが明らかとなりました。そしてこの南北道路の側溝の内側に、東側では8基、西側で9基の柱穴列が南北に並んでいる状況を確認しました。このような柱穴は朝集殿院南門や朝堂院南門、そして朝集殿院南方の壬生門付近でも確認されています。これらの柱穴列の性格についてですが、平安時代にまとめられた『延喜式』などの記載によると、元日朝賀や外国の使者を迎える儀式の際に、朝堂院から朱雀門に至るまでの各所に旗を立てる規定があります。おそらく、これと同様のことが平城宮でもおこなわれていたと推定できるのではないでしょうか。

今回の調査ではもう1カ所、朝集殿院のやや東よりに調査区を設定しました。この調査区は、朝集殿院の主要な建物である朝集殿のうち、東朝集殿と一部重複するかたちで設定されています。東朝集殿は唐招提寺の講堂として移築されたとの記録があり、1968年この東朝集殿の遺構を確認するために発掘調査がおこなわれました（第48次調査）。その調査の結果、著しく削平を受けた基壇跡や朝集殿院の東面築地が確認されました。

その後、平城宮各所の発掘調査が進展するにつれ、東区朝堂院では奈良時代前半に掘立柱建物が建てられ、奈良時代後半に基壇をともなう礎石建建物に改築されることが明らかになりました。また、朝集殿院の区画も掘立柱塀から築地塀へと変遷することもわかってきました。このような成果を受け、今回の調査では東朝集殿を再調査し、その変遷過程を明らかにすることが主要な目的でした。

そこで調査区の各所で基壇の下層がどのような状況になっているかを調査したのですが、単独で存在する柱穴を1基確認したのみで、掘立柱建物のようなまとまった遺構を確認することができませんでした。しかも、できるだけ基壇を壊さない方針で調査を進めていたため、これ以上の情報を得ることも難しい状況です。とはいえ今回の調査の結果、①下層に建物は存在しない、②基壇上層の礎石建建物より規模が小さな建物が基壇の中に隠れている、③下層建物が基壇の東寄りに位置している、という3つの可能性を指摘することができました。このことによって、今後の朝集殿の調査において、1つの指針を示すことができたといえます。なお、6月5日には現地説明会を開催し、好天にも恵まれ、600人以上の参加がありました。

（平城宮跡発掘調査部　林　正憲）

朝集殿院中央部の調査区（北東から）

東朝集殿の発掘作業風景（北東から）